

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24720177

研究課題名(和文)現代中国語における&lt;可能&gt;の言語化と意味派生のメカニズム

研究課題名(英文)A mechanism of verbalization and semantic derivation of potential events in modern Chinese.

研究代表者

勝川 裕子(KATSUKAWA, YUKO)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：40377768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は複雑に分化の進む中国語の可能表現が何を意味的根幹として成立し、其々がどのような派生経路を辿るのか、またその派生が如何なるメカニズムに支えられているのかを明らかにすることを目的とし、種々の可能表現を統語的・意味的観点から考察することを通じて、中国語における<可能>という文法範疇をより合理的且つ包括的に体系化することを目指した。可能を表す助動詞を主たる考察対象とし、可能補語形式と対照させながら、(1)助動詞“会”“能”の意味と派生経路、(2)可能の形式とモダリティの関連性、(3)助動詞“可以”の伝達機能と語用論的特徴について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify how complicated divisions of Chinese potential expressions are structured based on semantic roots and what derivation route individual expressions follow, and also to reveal the mechanism that supports those specific derivations. This study aimed at systematizing the grammatical category of <potential> in Chinese more reasonably and comprehensively by considering each potential expression from syntactic/semantic perspectives and clarified 1) the meanings and derivation routes of auxiliary verbs, “hui(会)” and “neng(能)”, 2) the relevance with the form and modality of potential, and 3) the communicative function and pragmatic characteristic of “keyi(可以)” while mainly considering auxiliary verbs which express potential and comparing with the form of potential complement.

研究分野：中国語学

キーワード：中国語 可能表現 可能の助動詞 可能補語 モダリティ 文法項目の導入順序

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現代中国語の<可能>を表わす表現形式としては、主に助動詞“会/能/可以”を用いる形式と、可能補語“V 得 R/D” (V:動詞、R:結果補語、D:方向補語を表わす)を用いる形式の2タイプが存在するが、タイプ内部だけを取り上げて、それぞれの用法が重複しており、また、<可能>以外にも<可能性・蓋然性>を表すなど、多義性を含むことが指摘されてきた。また、いずれの表現形式においても肯定文と否定文とでは文法的機能が異なり、使用分布の不均衡が見られる。このように、<可能>を表わす文法マーカが複数存在し、且つ多義性を有するということは、中国語話者の<可能>に対する複雑な認知パターンを反映していることを示唆している。

(2) 可能の助動詞研究では、従来、“会”は<習得可能>を、“能”は<能力可能>を表わすと定説化されており、教学上でもこのように導入されてきた。しかし、「習得とは何か、能力とは何か」という<可能>の根本的な概念については、これまで厳密な議論はなされてこなかった。これに対し、前課題である平成 21～23 年度科学研究費補助金(若手研究(B))「現代中国語における可能表現研究 領属物としての能力とその発現」(研究代表者:勝川)では、<可能>のプロトタイプを「動作・状態を実現する能力があること」と規定することにより、可能範疇において、まず<能力可能>が上位概念として存在し、そこから、<条件可能>、<許可>、<認知的可能>へと意味拡張していくことを指摘した。

## 2. 研究の目的

現代中国語における<(不)可能>は如何に言語化されるのか 即ち中国語に複数存在する種々の可能表現が何を意味的根幹として成立し、それぞれがどのような派生経路を辿るのか、またその派生がいかなるメカニズムに支えられているのかを明らかにすることで、<(不)可能>の本質を改めて捉え直すことができるだけでなく、教学上においても中国語学習者に対して一定の理論的指針を与えることができる。本研究課題では、上記の研究成果を踏まえた上で、中国語母語話者の<可能>に対する認知パターンを明らかにすることを主たる目的とし、種々の可能表現を統語的・意味的観点から考察することを通じて、中国語母語話者の<可能>に対する認知とその言語化について、より整合的な解釈を施すことを目指した。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究課題は言語研究であり、報告者(勝川)にとっては外国語研究であることから、まずは調査対象となる言語事象について、

大量の用例を収集し、そこで得られた言語事実と既存の理論を結び付け、理論の再構築を図るといった実証的な手法を採用した。用例の収集にあたっては、紙媒体の小説や新聞をはじめ、インターネット記事や各種コーパス(CCL、BCC)などを利用し、インフォーマントチェックを受けた上で論拠となる言語事実として論文中に示した。また、インフォーマントによる言語内省(文成立の可否や成立条件などを判定する作業)を通じて仮説の妥当性を図るという本研究課題の性質上、用例の一つ一つに対し、インフォーマントと綿密な議論を重ねる必要があり、これにより中国語母語話者の「可能に対する認識」を記述しようとした。

(2) 本研究課題設定当初は予定していなかったが、日本人中国語学習者における可能表現の習得状況についてパイロット調査を行った。調査手順としては、報告者(勝川)が在籍する名古屋大学の学部 1、2 年次クラスを調査対象とし、中国語学習者が筆記で産出した中間言語を回収し、得られたデータに対し意味・統語の側面から分析を行った。

## 4. 研究成果

本研究課題では、以下の4つの観点から、複雑に分化の進む中国語の可能表現に対し統語的・意味的分析を行い、中国語の各種可能表現が何を意味的根幹として成立し、それぞれがどのような派生経路を辿るのか、またその派生がいかなるメカニズムに支えられているのかについて考察を行った。

(1) まず、中国語の<可能>を表す表現形式(助動詞形式と補語形式)と前課題において分類した各種「可能の意味」との対応関係について考察し、その<形式>がその<意味>を担っている動機づけについて追究した。研究を進めるにあたって、可能研究が比較的進んでいる日本語との対照研究を行うことで、中国語の可能表現の特徴を効果的に抽出することができた。日本語の可能表現は動詞の意志性に深く関わり、無意志動詞は可能表現に用いられにくいことが指摘されている。これに対し、現代中国語においても、助動詞“能”が表す<能力>や<条件可能>、可能補語が表す<結果可能>などにもこのような傾向がみられる一方、<属性可能>や<認識可能>を表す“会”はあくまでも属性としての「能力」が発現可能な状態であることを表す、あるいは見込むため、望ましくない事態を表す動作・状態とも共起可能であるとともに、意志性による制限はほとんど見られず、無意志動詞も用いられることを指摘した。上の内容を日中対照研究の観点からまとめ発表したものが〔学会発表〕である。また、〔学会発表〕(講演)では、日本人中国語学習者の誤用に焦点を当て、その誤用産出の原因について追究した。

(2) 次に、中国語における<不可能>の言語化に焦点を絞り考察を行った。上で述べたように、中国語では<可能>の事態は主に助動詞“会/能/可以”を用いた形式、あるいは可能補語“V 得 R/D”を用いた形式で表現されるが、それぞれの用法が複雑に交錯しており、<可能>から<蓋然性>へ、<不可能>から<禁止>へと意味的にも広がりを見せる。また、肯定文と否定文では文法的機能が異なり、使用分布に不均衡がみられるなど、どの形式を用いて<(不)可能>を表すかは教学上においても難点とされてきた。〔学会発表 〕では“不能VR/D”と“V 不R/D”を取り上げ、「できないこと」即ち<不可能>がどのように言語化されるのか、その背景に如何なる表現意図が存在するのかについて、<可能>の事態に対する発話者認知の観点から考察した。また、以上の論を踏まえ、〔雑誌論文 〕では助動詞“能”の否定形式に<禁止>の意味が読み込まれる動機付けについて、モダリティの観点から分析を行った。

(3) 上記(2)と〔学会発表 〕を踏まえた上で、まず中国語教育現場における各種可能表現の導入時期、導入順序について調査し、その問題点を指摘した。次に、〔学会発表 〕及び〔雑誌論文 〕では、文法項目としての可能表現の導入順序について分析し、報告者(勝川)が在籍する名古屋大学の学部1、2年次クラスを調査対象とし、パイロット調査を行った。考察の結果、可能の助動詞“能”とはほぼ同時(もしくは直後)に可能補語“V 得了”(特に否定形式)を導入することで、非モーダルな<可能>の概念の早期定着を図ることが期待でき、結果補語、方向補語が導入された後に、改めて拡張形式としての可能補語“V 得 R/D”を段階的に導入し、可能補語全体の体系的把握に努めることが有効であることを指摘した。

(4) 最後に中国語において可能表現が用いられる際の語用論的特徴について、助動詞“可以”を取り上げ、置換可能なケースが多いとされる“能”との比較を通じて考察を進めた。〔学会発表 〕では、助動詞“可以”の中核的意義について再検討した上で、伝達機能の側面から“可以”を<許可><依頼><意向><勧め>の4タイプに類別した。それぞれのタイプが何を基盤として結びつき、どのように異なるのかについて、「評価のモダリティ」及び「行為要求」の観点から考察することを通じて、“可以”の持つ語用論的特徴を明らかにした。また、教学面においては、“可以”は従来、第一義的に<許可>義で導入されてきたが、<許可>では解釈できない用法が多く存在し、学習に躓きがみられる項目であることを指摘した。<可能>とは基本的に「(望ましい)事態の実現」であることを〔学会発表 〕で指摘したが、その実現に際し「実現を阻むもの(バリア)

そのものが存在しない、事態が実現するのに差支えない」ことこそが“可以”の中核的意義であり、上で挙げた各用法に共通する意義素であることを指摘した。これは「行為者の能力がバリアを通過する」ことを表す“能”と対称をなすものであり、このような<可能>の事態に対する捉え方の相違は、互いに置換可能なケースが多いとされる“能”と“可以”の使用選択において要となる要素であることを〔雑誌論文 〕において指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

勝川裕子「“可以”の伝達機能と語用論的特徴」、『ことばの科学』第30号, 査読無, 名古屋大学言語文化研究会, 2016, pp.111-126.

勝川裕子「中国語における<不可能>とモダリティ」、『ことばの科学』第29号, 査読無, 名古屋大学言語文化研究会, 2015, pp.63-78.

〔学会発表〕(計 10 件)

勝川裕子「初級中国語授業における TPR の実践」, 2017 年日本言語文化研究学会研究部会, 2017 年 3 月 19 日(日), 東華大学(中国上海).

勝川裕子「助動詞“可以”と判断のモダリティ」, 2017 年言語文化学術交流会, 2017 年 3 月 18 日(土), 上海師範大学(中国上海).

勝川裕子「“可以”の伝達機能と語用論的特徴」, 2016 年度日本中国語学会東海支部例会, 2016 年 11 月 26 日(土), 中京大学(名古屋市昭和区).

勝川裕子「可能表現の語用論的意味」, 2016 年日本言語文化研究学会研究部会, 2016 年 3 月 20 日(日), 東華大学(中国上海).

勝川裕子「中国語可能表現の導入順序についての再検討」, 2016 年言語文化学術交流会, 2016 年 3 月 19 日(土), 上海師範大学(中国上海).

勝川裕子「“できる”から“うまい”へ」, 2015 年言語文化学術研究会, 2015 年 3 月 23 日(月), 上海師範大学(中国上海).

勝川裕子「中国語における<可能>とモダリティ」, 2015 年日本言語文化研究学会研究部会, 2015 年 3 月 22 日(日), 華東大学

(中国上海).

勝川裕子「<不可能>をどう表現するか」, 2014 年度日本中国語学会東海支部例会, 2014 年 11 月 29 日(土), 南山大学(名古屋市昭和区).

勝川裕子「誤用から学ぶ中国語の可能表現」(講演), 2013 年度広東外語外貿大学南国商学院・名古屋大学中日言語文化講演会, 2014 年 3 月 9 日(日), 広東外語外貿大学南国商学院(中国広州).

勝川裕子「「できる」ということ 中国語と日本語の可能表現」, 2013 年度華南理工大学・名古屋大学中日言語文化合同研究会, 2014 年 3 月 8 日(土), 華南理工大学(中国広州).

[図書](計 1 件)

勝川裕子『現代中国語における「領属」の諸相』, 2013, 全 274 頁, 白帝社, (平成 24 年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)助成による出版).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

勝川裕子 (KATSUKAWA, Yuko)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・  
准教授  
研究者番号: 40377768

(2) 研究分担者 なし  
( )

研究者番号:

(3) 連携研究者 なし  
( )

研究者番号: